

抗NMDA受容体脳炎

絆を求めて～6.25初の患者交流会（5）情報少ない難病 家族間の交流が必要

毎日新聞 2017年6月24日 10時30分（最終更新 6月24日 10時30分）

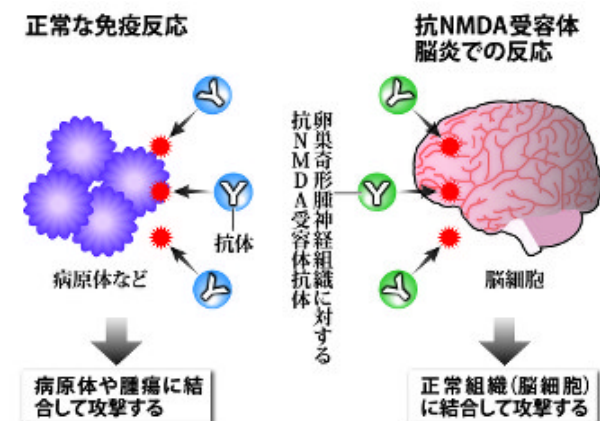
「抗NMDA受容体脳炎」の連載最終回は、その患者や家族らと手を携え、治療や研究に関わってきた大阪医科大の中嶋秀人医師（54）のインタビューをお届けする。中嶋医師は2013年末に患者家族らと一緒に厚生労働省へ指定難病にするよう働きかけ、要望書を提出した経験を持つ。6月25日の初の交流会では治療の現状などを解説するとともに、孤独になりがちな患者や家族間の交流の必要性などを訴える。【聞き手・照山哲史】

脳波の異常などがあれば、まずは神経内科へ

——この病気との関わりを教えてください。

広告

抗NMDA受容体脳炎は2007年にスペインの大学教授、ダルマウ氏によって突き止められました。それ以前にも日大の亀井聡教授らによって、若い女性を中心に異常な精神症状が長引くのが主な症状である脳炎の存在が示されていました。それが抗NMDA受容体脳炎だったのですが、私が勤務する大学病院にも該当する患者がいたのです。



抗NMDA受容体脳炎が免疫反応によって起きるイメージ

——07年以前のケースですか。

01年ごろです。10代の女性でした。幻覚を見たり激しい妄想が起きたりして病院で診察を受けたが「原因が分からない」と言われた。仕方なく「祈とう師に頼んで、悪魔払いをしてもらった」との話でした。原因が分からないものの、ヘルペス脳炎患者に対する治療をするなどしましたが、そのうちに意識がなくなり、口を突き出したり、引っ込めたりの不随意運動を繰り返すようになりました。入院して1カ月が過ぎたある朝、病室に行ったら、ぱちっと目が

開いているではありませんか。急に目覚めたという感じです。そこから日に日に良くなり、言葉も発するようになって、1カ月ぐらいのリハビリを経て退院しました。（治験が進んできた）今なら抗NMDA受容体脳炎を疑い、卵巣の腫瘍の有無を調べるなどしていただい

—これまでどのくらい患者を診てきましたか？

5人、全員女性です。いずれも統合失調症のように幻覚などを伴う精神症状があるのが共通する症状でした。

—精神症状段階で医師が診断するのは難しくありませんか。

精神症状があるので、まずは精神科に行く人はたくさんいるでしょう。その中で実際に抗NMDA受容体脳炎にかかっている人は発症率（100万人当たり0.33人とのデータがある）から考えれば、ごくわずかです。けいれんや脳波の異常があったら神経内科に診てもらうことを勧めます。

将来に希望を持てる病気 決して諦めずに

—この病気の「発見時」は卵巣奇形腫との強い関連性が指摘されていました。

奇形腫によってできた抗体で引き起こされると判明したからです。しかし、卵巣奇形腫がないのに発症するケースがあることも分かってきました。私が担当した5人の患者で奇形腫があったのは1人だけです。奇形腫がなければ抗体のできる原因が分かりません。奇形腫がなかった4人のうち1人は5年後に再発しました。再発時も卵巣を調べましたが、腫瘍はありませんでした。卵巣奇形腫によって抗体ができたことが明確なケース以外は、再発可能性があり、継続的にチェックしていく必要があります。

—患者への注意やアドバイスをお願いします。

発症の疑いがある場合は、できるだけ総合病院を受診してください。人工呼吸器管理のできるICU（集中治療室）、神経内科のある病院をお勧めします。

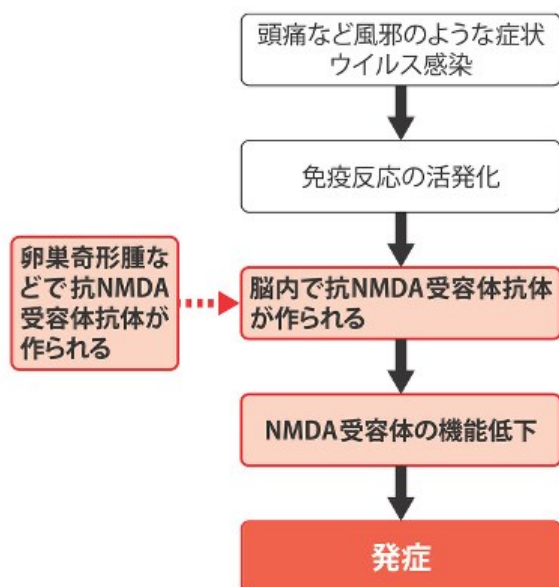
—抗NMDA受容体脳炎は解明以前は「原因不明」とされた病でした。脳炎といわれる病気はどこまで解明されているのでしょうか。

治療の現場では、発症原因となるウイルスもたくさんあり、全ての可能性を検査しきれません。また、抗NMDA受容体脳炎のような自己免疫性の脳炎では、毎年のように新たな抗体が特定されてきています。けいれん発作を抑える薬や免疫抑制など、脳炎向けに施される治療をしているうちに治ってしまうケースも多いのが実情です。実際、脳炎のうち、抗NMDA受容体脳炎は4%で、4割は「原因不明」とのデータもあります。

—そういう意味では、抗NMDA受容体脳炎と診断できたケースは対応のしようがあり、悲観すべきではないということですか。

この脳炎は回復まで長く時間を要する人もいますが、特定の抗体によって引き起こされるとの原因が判明しているので治療の施しようがあります。将来に希望を持てる病気なので、諦めずに家族ら周囲の皆さんがサポートしていく必要があるでしょう。

抗NMDA受容体脳炎発症の仕組み(仮説)



抗NMDA受容体脳炎発症の仕組み(仮説)

なかじま・ひでと 1988年大阪医科大卒業。医療法人清恵会病院内科部長・副院長などを経て、現同大神経内科講師。日本神経学会(代議員・専門医)、日本神経治療学会(評議員)、日本神経感染症学会(監事)、日本脳卒中学会(専門医)などに所属。主な著書に「3分間神経診察法」(総合医学社刊)など。

■ 交流会の参加申し込みはこちら

交流会は6月25日(日)午後1時半から東京都難病相談・支援センター=東京都渋谷区広尾5=で。「抗NMDA受容体脳炎について-現在の治療とこれからの展望-」と題し、大阪医科大の中嶋秀人医師(神経内科)が講演する。参加無料。申し込みや問い合わせはメールで(kounmdajnouen2017@gmail.com)。

—25日の交流会開催に期待したいことは。

患者や家族の皆さん方は病気が分かってから、また情報も少なく大変不安な思いをされてきたことでしょう。講演では抗NMDA受容体脳炎のことを正確に分かりやすく説明したいと考えていますし、治療や療養生活に関して意見交換や交流の場にしてほしいと思います。また、その場で得た情報や意見の多くを、私たち医療人と共有し、今後の診療と医療の発展につなげていかねばならないとも思います。=おわり